

令和 8 年「角館のお祭り」曳山 外題・場面解説

	外 題	登場人物	作 者	解 説
岩瀬若者一同	長久手の戦い 竜泉寺川の間	本多平八郎忠勝 羽柴筑前守秀吉	広目屋	戦の最中、重臣を失った秀吉は自ら軍を率いて戦場へ。竜泉寺川まで進出したところで徳川四天王の一人、本多平八郎忠勝が立ち塞がる。後に天下人となる敵大将の三万の軍勢に対し、忠勝は五百の兵を引き連れて参上し牽制する。その威風堂々たる姿に秀吉は痛く感服し、忠勝に敬意を表し軍を引き返す。生涯無敗を誇ったその猛将を、秀吉は「天下無双の東の大将」と称え、その武勇と忠義に賛辞を惜しまなかったという。
西部若者	小鍛冶	三条小鍛冶宗近 稻荷大明神	文 怜	平安時代中頃、一条天皇の勅命を受けた刀匠・三条宗近は、御剣の鍛造を命じられる。しかし、刀を打つために欠かせない相槌を務める者がおらず、稻荷大明神に加護を願った。すると神は童子の姿で現れ宗近を導き、やがて鍛冶場でともに槌を振るう。こうして名剣「小狐丸」は鍛え上げられ、一条天皇へ献上された。
駅前若者	鬼揃紅葉狩	平維茂 鬼女	薦谷流 駅前若者	紅葉の美しい山の中、女たちが紅葉を愛でながら酒宴をしているところに、平維茂の一向が通りかかります。女に酒を勧められた維茂は、美しい舞を見ながら酔って眠ってしまいます。女たちは維茂の眠りを見守りて姿を消します。維茂の夢の中に八幡宮の末社ノ神が現れ、女たちが鬼神であると教え、太刀を授けます。目を覚ました維茂は、雷鳴とどろく中、襲いかかる鬼神を激しい戦いの末に切り伏せるのでした。
菅沢丁内若者	鈴鹿山鬼伝説	坂上田村麻呂 大嶽丸	菅沢丁内若者	平安時代、鈴鹿山には鬼神・大嶽丸が住み、妖術や雷を操って人々を苦しめ、都への往来を妨げていた。朝廷はこれを鎮めるため、武勇に優れた坂上田村麻呂に討伐を命じる。田村麻呂は鈴鹿山へ進み、荒れ狂う雷鳴と炎の中で大嶽丸と対峙する。強大な鬼神を前にしても一歩も退かず、武勇と知略を尽くして立ち向かい、ついに激しい一騎打ちへと挑む
本町通り	今孔明 稲葉山城奪取	竹中半兵衛 斎藤龍興	広目屋	主君・龍興は酒色に溺れて政務を顧みようとせず、一部の側近だけを寵愛して竹中半兵衛や西美濃三人衆を政務から遠ざけていた。龍興の寵臣である斎藤飛騨守に嘲弄されることがあった。数日後、飛騨守が龍興居室の宿直を務めていたとき、竹中は稲葉山城に詰めていた弟・重矩の看病のためと称して入城し、重矩の居室で武装して宿直部屋に居た飛騨守を斬殺して稲葉山城を16人で乗っ取ったとされている。
駅通り若者	紅葉狩	平維茂 戸隠山の鬼女	広目屋	紅葉が鮮やかに色づく戸隠山を訪れた平維茂は、山中で高貴な姫と侍女たちの一行に出会い、酒宴へ招かれる。姫の優雅な舞に心を奪われ酔いしれた維茂は眠り込むが、山神が現れ、姫の正体が恐ろしい鬼女であると告げる。目覚めた維茂は鬼女と激しく戦い、名剣小烏丸の力を得てついに討ち果たす。
西勝楽町若者	耳川の合戦	島津義弘 大友宗麟	文 峰	天正六年（一五七八年）、戦国時代後期。織田信長が天下統一を進める一方、九州では島津氏と大友氏が日向国の支配を巡って激突した。大友宗麟率いる大軍に対し、島津義弘は退却を装って敵を誘い込む「釣り野伏せ」の戦法でこれを撃破し、大友軍は壊滅する。この勝利により島津氏は九州南部の覇権を確立し、九州統一へ大きく前進した歴史的な合戦である。
桜美町若者	助六	花川戸助六 三浦屋の揚巻 髭の意休	薦谷流 桜雅会	花川戸助六（曾我五郎）は、源氏の宝刀「友切丸」を探すため、三浦屋で客に喧嘩を仕掛け刀を抜かせる。この素行を案じ、身を扮して駆けつけた兄・曾我十郎と母・曾我満江だが、助六の真意を知り、無事を願って紙衣を授ける。紙衣をまとった助六は、揚巻の襦袢の蔭に身を潜めていたが、意休の打撃に我慢できず姿を現す。意休は自らの刀で香炉台を真っ二つに切り捨てその場を去るが、その刀こそ探していた「友切丸」だった。血の氣に逸る助六は揚巻と共に意休を待ち伏せしようと駆け去って行く。
七日町丁内	布引瀧悪源太霊討	悪源太義平 難波経房	小 松	源義朝の長男、義平は武勇の誉れ高く、その豪勇さから「悪源太」と称されていた。平治の乱で敗れた義平は、平清盛を討つべく京の都に潜伏するが捕らえられ、六条河原で処刑される。義平は介錯人難波経房を睨み、「必ず雷神となって蹴殺さんずるぞ」と言い放ち斬首された。八年後、清盛一行が摂津国布引瀧に詣でたところ、一天俄かに曇り、義平が雷神となって現れた。経房は抜刀し立ち向かうが、雷に撃たれ絶命。義平は復讐を果たすのであった。
中央通り	源平布引瀧	木曾先生義賢	広目屋	源平布引瀧の木曾先生義賢は、平家全盛の時代を生きる源氏の武将である。義賢は、源氏再興を胸に秘め、正体を隠して使える行綱らと志を通わせる中、平家の使者から屈辱的な要求を受けた事でついに怒りを爆発させる。仲間を逃した後、平家の討手に武具は不要と、優美な素襖大紋（すおうだいもん）を身に着け単身で平家の大軍に向かう。義賢の武士の誇りと覚悟を描いた名場面である。
横町若者	大江山鬼退治	酒吞童子 源頼光	横町若者	平安中期の物語。都から若者や姫君を拐い大江山の岩屋に住み着いた鬼「酒吞童子」を源頼光と四天王「渡辺綱・坂田金時など」が勅命を受けて退治に向かう。神仏から授かった「神便鬼毒酒」という毒酒で鬼たちを眠らせ、くびを刎ねて見事に都へ凱旋した。
山根谷地町旭会若者	決起前夜 戦雲本願寺	本願寺顕如光佐 明智光秀	広目屋	将軍足利義昭の策略『織田包囲網』は甲斐の武田、越後の上杉、西国の覇者毛利、浅井に朝倉と名だたる戦国大名が揃う。織田信長はその一角を担う顕如と対立する。石山本願寺は陸路の要であり政治、経済、軍事全てにおいて優れた「難攻不落」の要塞。「進めば極楽 退けば地獄」と大書した旗を掲げ、一死報恩の覚悟で進む一向宗に織田軍は攻めあぐねる。そんな中、天下統一の足掛かりとして明智光秀が十年にわたる熾烈な戦いに立ち向かう。
北部丁内若者	時今也桔梗旗揚	森蘭丸 安田作兵衛	北部丁内若者	物語の主人公は、武将・武智光秀（＝明智光秀）。主君・小田春永（＝織田信長）に仕える光秀だが、ある出来事をきっかけに強い屈辱と怒りを抱くようになっていく。やがてその感情は抑えきれなくなり、ついに光秀は「時は今」と決意し、反旗を翻す――。こうして、後に歴史を大きく動かす本能寺の変へとつながっていく。
上新町若者	鎌倉三代記	佐々木高綱 三浦之助	薦谷流 上新町若者	『鎌倉三代記』は、鎌倉時代の政争を題材にした時代物で、「絹川村閑居の間」は物語の中心となる場面です。武将・三浦之助義村と妻・時姫が、忠義と夫婦・親子の情の狭間で苦悩する姿を描きます。敵味方に分かれた宿命の中、それぞれが武士としての義を貫こうとする葛藤が丁寧に表現され、時代物ならではの重厚な人間ドラマと悲劇性を味わえる場面となっています。
下岩瀬町若者	一ノ谷墩軍記須磨浦合戦	熊谷次郎直実 平敦盛	廿町如月会	平家の軍は船に乗り、八島へ向けて退こうとしている。須磨の浜の波打ち際、平敦盛もその船を目指し沖に向って馬を走らせる途中、引き返して勝負あれとの熊谷次郎直実の言葉に、平敦盛は引き返し、一騎討ちの勝負に及ぶ。最後は熊谷が敦盛を組み伏せた。熊谷次郎直実は、覚悟を極め自分の首をとれという平敦盛を憐れみ逃がそうとする。平敦盛は自分の回向を頼み、熊谷次郎直実はやむを得ず、ためらいながらも平敦盛の首を討ち落とした。
東部若者	吉野山の戦い	佐藤忠信 横川覚範	薦谷流 東部若者	平家滅亡を果たすも、兄である源頼朝の怒りに触れ追われる身となった源義経。わずかな家来達と吉野山に入ったが、義経追討の命を受けた僧兵たちが迫っている。この僧兵を率いるのが、吉野一の荒法師と呼ばれる横川覚範である。ここで義経の忠臣・佐藤忠信が自ら囃となり覚範と激しい戦いを繰り広げ、花矢倉から矢を浴びせついに覚範を討ち取った。忠信の活躍により義経一行は落ち延びることができたという。
大塚若者	源平盛衰記 壇ノ浦の合戦	源義経 平知盛	大塚若者	一一八五年、源平最後の決戦壇ノ浦。潮流を読み切った義経は巧みな軍略で平氏を追い詰め戦局はついに源氏へ傾く。平家総大将平知盛は一門の滅亡悟り、「見るべきほどの事は見つ」と言い残し旋とともに碧き海へ身を沈めた。かくして平氏は滅亡し源氏の世が幕を開ける。本場面は武勇を悲運が交錯する歴史的場面を題材とし義経の知略と知盛の壮絶な最後を描くものである。
川原町若者	女暫	巴御前	広目屋	皇位へ即こうと目論む悪党の清原武衡が、自らに反対する加茂次郎義綱ら多人数の善良なる男女を捕らえる。清原武衡が成田五郎家来に命じて、加茂次郎義綱らを打ち首にしようとする時、鎌倉権五郎景政が「しばらく～」の一声で、颯爽と現れて助ける、歌舞伎十八番「暫」の名場面。鎌倉権五郎景政を女方巴御前に置き換えたのが「女暫」である。